

# 花見楽しむ光景句に

## 文人の 武蔵野

武蔵野やつよふ出て来る花見酒

武蔵野の花見を詠んだ作品です。「つよふ出て来る」は、お酒の勢いで声が大きくなったり、口論が始まったり、喧嘩になったりという野外の宴席ならではの空気を表しているのだと思います。特別な日にひらけた場所に集い冷酒などを酌み交わし、気も大きくなり、身分差を超えた無礼講ということもあつたかも知れません。武蔵野の「武」とひらがなの「つよふ」の対比

### 土方歳三「豊玉発句集」

と組み合わせに表現上の面白みがあります。

この句を詠んだのは、土方歳三（1835〜1869年）。武州日野で生まれ育ち、

文武に励んだ土方は、文久3年（1863年）2月、仲間たちと小石川伝通院に結集し、京都の壬生に向かいます。

まもなく「新撰組」を拜命し副長となる土方は、同じ文久3年に「豊玉発句集」をまと

められています。俳諧に親しんだ土方の、いわば武蔵野時代の句集であり、武蔵野から江戸へ、そして京都へと旅立つ前に一区切りをつけるために編まれたものと考えられます（管宗次「俳遊の人・土方歳三」句と詩歌が語る新選組」を参照）。



土方歳三（国立国会図書館近代日本人の肖像「より」）

丘に居て呑のもけふの花見かな

これも土方の句です。ふだんは酒を呑む場所ではないはずの丘に、いそいそと弁当や飲み物を持参した男女が昼間から集まっています。筵を敷くなどして宴の準備が始まる様子がかがえます。桜の季節にだけ見られるそうした光景も含めて今日の花見なのだなあ——といったところでしょうか。

武蔵野にあって、その時分になれば「野」でも「丘」でも花見を見物し、みずからも花見

酒を呑みほす土方の姿が目につかぶようです。桜の美しさや妖しさに心を奪われ、花と我との世界に没入して個としての人生を語りがちな文人とは異なり、花見を楽しむ庶民の共同体とそれを引き立てる舞台としての武蔵野とをガッツリ捉える眼差しがあるところに農民出身の武人である土方らしさを感じられます。

土方歳三は、明治2年（1869年）、五稜郭の戦い（箱館戦争）で落命します。新政府軍と戦う直前に旧幕府軍が最後の宴を催した場所は、当時の函館にあった「武蔵野楼」という名の遊郭だったそうです。

（武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍）

\*

過去の連載は、読売新聞オンラインでお読みいただけます。スマートフォンはQRコードから。



ドから。